

ペスタロッチと教育の根幹

ー 『ゲルトルートはいかにその子を教うるか』と『親と教師への書簡』をめぐって ー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
今木 浩人

教育における「絶対的なよりどころ」とは何か。親や教師は環境が変わり、社会が変化したときに、子どもたちに何を示していけばよいのであろうか。

わが国の多くの教育者はペスタロッチの教育思想を、教育の規範としてきた。本研究では教育のよりどころと考えられるペスタロッチの考え方を整理し、「教育の根幹」という「教育のよりどころ」についての考察を進めた。

長田新は「ペスタロッチに還れ」という語を使った。「ペスタロッチに還れ」は、「ペスタロッチの教育思想や教育方法にもどって教育を考え直す」という意味である。戦前から、長田に限らず、わが国の教育者はペスタロッチの教育思想を教育の基礎、教育の基本と考えた人が多かった。

本論文では、ペスタロッチの主著である『ゲルトルートはいかにしてその子を教うるか』と彼の教育実践を示している『親と教師への書簡』から「教育の根幹」について考察した。

ペスタロッチは『ゲルトルートはいかにしてその子を教うるか』において直観教授（*Anschauungsunterricht*）を中心とし、自然、知識、技能、道徳の調和によって教授をおこなうことの大切さを示し、子どものための教育の重要性を主張していた。

また、『親と教師への書簡』から保護者や教師について考察した。書簡から彼の教育実践を読み取ることができ、ペスタロッチの教育論、教授法について考察することができた。ペスタロッチは特に実践からの理論を大切にしていた。

本論文における考察から、ペスタロッチの示していた「教育の根幹」とは、常に教育をおこなう者は子どもの立場になって考え、子どものために教育をおこない、その子どもにとっての最善の発達を促すこと、と結論づけたい。子どものための教育とは、子どもにとって必要な能力を育んでいくことである。

ペスタロッチが示したように、子どもにとって環境が変わり、状況が変わり、時代が変化したとしても、社会で活躍できる能力を大人が効果的に援助して育んでいくことこそ教育の真の姿である。